

変わらない明日

変わらない明日

「近親相姦」

[提供：NAN-NET](#)

変わらない明日

変わらない明日

兄

小さくクシヤミをした私は体を震わせて彼に体をひつつけた。疲れてるのが寝息だけ立てて仰向けに寝ている。相手が兄だと言う事にも関わらず、寝ている彼に口付けした。事は昨夜のこと。

中学二年の私は、未だに兄と一緒にの部屋で寝ていた。

アメリカは日本と違って、部屋は大きいが部屋の数が少なかった。普通の部屋でだいたい大人が4人丁度入れそうなくらいだった。

ベッドを置くと狭いから、ということでもこちらに来て日本に居た

時の様に布団を敷いて寝ていた。

私の兄はユタスクールに通っていて、日本で言う大学へ向けて頑張っている高校三年生。

ここに来てもう3年も経つから、英語の方は不自由なく暮らしていた。兄は日本でサッカー、バスケ、水泳など当たり前のように知っている

スポーツは全て得意だった。

頭も良く、眼鏡をかけてるガリ勉少年のような感じは全く感じられなく、優しく、美形と言えるわけでもないが私にとっては美形に思えるような顔立ちだった。

そんな兄が突然、私を襲ったのです。

「お兄ちゃん」

宿題も終わって、明日は日曜日という土曜の夜。

風呂上りで最近伸ばし始めた髪をタオルで拭いて部屋へ近づいた時、ふいに唸り声が聞こえた。

そつと扉に耳を当ててみると、時折私の名前を呟くように呼んでいた。

「めい・・・っ・・・」

こつそり扉を開けると、既に敷かかれている布団の上で下半身裸になった兄が上下にちんちんをすごいていた。

私は親が結構工口い行動をするので、小6の頃からHやSEXに興味があった。

兄とこんな関係になる前から私はここを毎日のように覗いています。

そして、たまに隠れて印刷した話を兄の居ない夜にオナニーをしていた。

女性のオナニーはこういうサイトなどでよく知っていたが、

男性のオナニーを見たのはこの時が初めてだった。

いつも家族の服は同じ籠に入れてその籠を洗濯機に持っていくようにしていましたので、自分のパンティが無くなっていることなんてさっぱり知らなかった。

奥の方を覗いた時、私とその日丁度オナニーの後のパンティの臭いを嗅ぎながらオナニーをしていたのだ。

これだけ激しいのは初めてで、ふらつと持病の貧血で少し開けてあった扉に寄りかかってしまい、そのまま前に倒れてしまった。

親はパーティに行っていて11時頃までこの日は帰ってこなかった。いった後なのか、先から精液がダラリと垂れていた。

顔は驚いていても、すぐにティッシュで精液を受け止めていた。
「……みてたのか？」

頭の中が真っ白でクラクラしてる時に兄がしゃがんでいる私の肩を抱いて言った。

私ははつと我に戻って小さく頷いた。

この時多分少し顔が赤かったかもしれない。
顔が熱くなつて、今にでもふらつと倒れそうだった。

何かを決意したように兄が軽く唇を噛むと、私を抱きしめ

「めい」

と耳元で囁いた。

ここに何度も着ていても、やっちゃんいけな、と思っていた。
そして今日、それが壊れたのだった。

私を布団の上に寝かせ、上から覆い被さって来た。

兄は上T・シャツだけで、下は裸だった。

私は前にボタンのついているパジャマを着ていた。

そつと体を摺り寄せてきて、兄の暖かい息が耳へ吹き掛けてきた。

気持ちよくてビクビクつと反応すると、口を塞がれ、舌を入れられた。

初めてのディープリキスで、どう反応したらいいのか迷っていると、兄の方から私の下に絡み付けてきた。

自慢と思うが、家の家族は怖い(?)程舌が90度や180度に回転する。

中でも兄は食事中など、よく舌を回転させて見せてくれた。

その舌が、私の口の中を舐めまわした。

器用で、まるで歯磨きでもしてあげるように舐めまわした。

気づいた時には私も同じように舌を絡ませ、兄の口の中に入れていた。

ディーブキスに答えてくれた事が兄は嬉しかったそうで、ゆっくりと

私のパジャマのボタンを外し始めた。

段々舌が疲れてきて、息し辛くなったので、顔を横に振って唇を離れた。呼吸を整えてる間にも、兄におっぱいをしゃぶられ感じ始めてしまった。そして、おっぱいだけで初めていつてしまったのだった。

ズボンも脱がして兄はT・シャツも脱ぐと、パンティだけの私を抱きしめてきた。もうどうなつてもいいや、という気持ちで抵抗する気持ちが消されてしまった。すっかり濡れてしまったパンティを、突然何をするのかと思ったら上からちんちんをあてがった。

既に硬くなりきつてるちんちんが私のオマンコを撫でてくれて声を漏らしてしまっ

た。
もう叫びすぎて声がかれてるというのに。

「あ」

私が声をかけた時には既にパンティは脱がされて、ぽいっと捨てられました。我慢しきれなく、申し訳なさそうな顔をして私を見つめました。

「入れるけど……いいか？」

この時は兄にはまだ罪悪感が残っていたのだろう。

ただど私はすぐに頷いて兄の首に腕を巻きつけた。

私のお尻を持ち上げると同時にぐつと中に入れて来た。

一度、私はメル友と逢ってSEXをした事があり、もう処女は終わっていた。しかし、この日までずっと兄に黙っていたので、兄は遠慮してゆっくり入れていた。

あまりにもゆっくり過ぎて、私の方からぐつと腰を振って奥に入れた。

驚いたのか、しばらくは私をじつと見ていた。

私はクスつと笑って兄の口に軽く口付けると、それが合図のように突然兄は腰を激しく動かした。

「あつ、あつ、あつ、あつ！」

「めいつ、好きだつ、愛してるうっ!!」

急に中が熱くなつたと思うと、兄ははあはあ息を切らして私の上に倒れた。

どろどろと自分の膣から精液が流れ出ること気づいていた。

あと片付けしないとばれる、と思って体を起こそうとしても、兄の体の方が重くて起き上がれなかった。

その時に耳元でもう既にタオルが引いてあると聞いて、今まで気づかな

かったタオルの生地がお尻のあたりに感じられた。

私が座り込んで頭が真つ白になっていた時に肩にかけていたタオルをとつさに引いたそうだ。

「ん……めい…寒いかな？」

しがみ付いた私に気づき、片腕で抱きしめながら布団をかけてくれた。

寝る前に服を着たのだが、前のボタンだけ開いていた。

そつと抱きつくふりをして兄の谷間に手を当てる。

硬い物が当たり、へその方へ向かって立っていた。

服の上からゴシゴシしごとくと、兄の顔が快感に声を上げようとするのを堪えていた。

布団の中に潜りこみズボンとトランクスを少しだけ下げると、ばねのように飛び出た。

先を一生懸命舐めていると、さらに膨らんできた。

口の奥入るまで啜えると、上下にしゃぶりだした。

一言も喘ぎ声を上げなかったが、快感に震えていた体がびたつと止まると、

口の中に大量の精子を出した。

息が詰まりそうだったが、こぼさないように全て飲み干した。
「めい……愛してる……」
再び抱きしめあつて眠りに落ちた。

変わらない明日

二〇〇八年三月三十一日 投稿

掲載元 官能小説セレクション

(URL: <http://www.kannou.cc/>)

提供 NAN・NET

(URL: <http://www.nantv.com/index1.htm>)

投稿された文章の著作権は、全てNAN・NETに帰属します。当サイト内の文章、音声等の情報の無断転載、無断引用は禁止です。情報の転載、引用、掲載、取材等をご希望の場合は、必ずご一報ください。上記の要望に対し当社が問題が無いと判断した場合、他メディアにおいて、投稿された情報が掲載等される場合があります。

